

深志神社の神々

松本市文化財審議委員 中川 治雄

小笠原秀政の驚き
宮村明神と天満宮は信濃守護小笠原氏が井川館の守護神として勧請した神です。諏訪明神は健甕名方富命のことで宮村に、天神は菅原道真のことで、死後に御霊として北野天満宮にまつられ、のちに政治や学問の神として尊崇された神で鎌田村に勧請されていました。

慶長十八年（一六一三）石川康長の改易の後に、松本城に再び入部した小笠原秀政の目に映った松本城下は、「父貞慶と共に城下町の名前を付けた天正の頃は全く変わり、天守閣が聳え、町人の住む町々は軒を連ねていて、その変わり様は目を瞠るばかりだ。」と記しています。

天満宮を勧請

秀政は、この活気に満ちた町を、さらに町人が生き生きと遊びをもって働く町にしたいと考えました。そして、「家臣たちは主君に忠誠心を持つ

さらに翌二十年春には社殿をおよそ百歩（約五十メートル）程北に移して、宮村明神の北の位置に西向併置して、宮村天満宮と崇めたのです。

社殿の配置と賑わい

創建当時の社殿の配置は、正面右に宮村大明神、左に宮村天満宮と並立し、両社の前に幣殿が置かれていました。現在の二間・七間の長幣殿は宝暦二年（一七五二）に普請を始め同八年に成就したものです。また古い幣殿は、宮村明神本宮と一緒に明暦四年（一六五八）造立ですが格好は天満宮の幣殿と同じです。天満宮の幣殿は本宮と同じ慶長十九年です。

次は御拝殿です。文化十四年（一八一七）六月に九尺約二、七メートル）程西へ移し、京間三間四方の社殿に建てかえました。御幣殿と御拝殿との間が狭く、年々舞台を曳くときに破風で屋根瓦を落とすからだとのことです。古拝殿は北側に移して御輿殿になりました。

こうして社殿が整ってくると祭りも賑わいを見せ、それにもない摂社や末社も勧請されてきました。

慶長二十年正月十一日の市初めに宮村神主が「市神の塩」

『善光寺名所図会』『宮村大明神境内』図

天保14年(1843)豊田利忠稿 嘉永2年(1849)刊
江戸時代の境内の様子、社殿配置図などはいくつが残されているが、状況を描いたものとしては、本図がもっとも古い。境内に見える二十余の摂末社や碑などは現在、場所が移されたり、合祀されている。



参考文献
「信府統記」
「善光寺道名所図会」
「松本城主代々記」
「天保十五年甲辰年十一月 天満宮・宮村神社社殿絵図」

を売り出しました。寛永十七年（一六四〇）には宮村天神祭りが宮村明神祭りと一緒に斎行されるようになりました。水野忠直公の時から、祭りに初五俵が町方に下げ渡されるようになりました。元禄十一年（一六九八）には忠直が神輿を両社に寄進し、町人の心意気も一層高まり、祭りは近郷近村からも人々が訪れ

城下町を越えた祭りになったのです。天保十四年の頃には「善光寺名所図会」「宮村大明神境内」図に摂・末社二十余社を数え、参詣者で賑わっていたことがうかがえます。

授与品

御神札は神棚にまつて一家の安全、神恩感謝などを、お守りは一人一人が身につけて切実な願いなど祈ります。いずれも神さまが身近で見守っておられます。神宮大麻・神社大麻、商売繁昌・開運厄除、学業守護等のお神札や、新春の縁起物（熊手・破魔矢・鶴矢・福だるま・福俵・絵馬・干支置物・初言等）、おみくじ等授与所でお受け下さい。

厄祓（厄除）祈禱

厄年とは、災難や障りが身に降りかかりやすいと忌み慣れられている年のことです。これを迎える年齢は人の一生において、ちょうど身体的・精神的・社会的に転換期を迎える節目と重なります。そのようなときあたり、人々はその厄を祓いて、神さまの御加護をいただいで心機一転して次なる生に向けて進む覚悟を新たにできました。厄祓いの時期は、全国的に正月から二月の節分にかけてとなります。

平成19年厄年（本厄）
（数え年による）

女	男
19歳 (平成元年生)	25歳 (昭和元年生)
33歳 (昭和15年生)	42歳 (昭和17年生)
37歳 (昭和19年生)	61歳 (昭和36年生)

節分祭のご案内

2月3日、午後2時から豆炒り式、5時に節分祭を斎行。引き続き社殿前特設舞台で、祥姿の年男・年女、また奉賛いただいた福男・福女による豆撒き式が賑やかに行われます。豪華な福投げの景品も数多く用意しています。また子供たちが安全に拾うことができるよう子供コナーを設けています。

【賛助者の募集】
○氏子町内外の崇敬者の方々から賛助者を募っています。

（一般賛助者 四十五百円）
（特別賛助者 六千円・二万円）
【奉仕年男・年女等の募集】
○多年生まれの方々、厄年歳祝いの方及び特別奉仕される方などを募集しています。福豆等をまき、回落しをしていただきます。
（初穂料 一万五千元）
問合せ、お申し込みは1月30日迄に社務所まで。

梅風閣のご案内

忘年会、新年会にご利用下さい。問合せ、お申し込み
電話 0263-32-6310

後記

▼シリーズである「旧町名「石碑」めぐり」とりまく歴史と文化、「あれこれ」・「質問箱」等を通じて神社と歴史・文化・地域との関わりを幅広く紹介していきたいと思っています。

ふかし 深志神社社報第3号
発行日 平成18年12月1日
発行所 深志神社社務所
〒390-0815
松本市深志3丁目7番43号
電話 0263-32-1214
FAX 0263-32-5908
印刷 (株)日本広告

ふかし



平成十八年冬号
深志神社は信州松本城下
南深志の地四十八ヶ町
氏子の守り神さまです

深志神社社報 第3号



天神祭り 元禄神輿が渡御

当社の例祭天神祭りが、7月24日の前夜祭、翌25日の本祭と賑々しく斎行されました。
今年の特色は、25日の神輿神幸に元禄神輿が渡御されたことです。

御神幸には二基（お諏訪さまと天神さま）の神輿が氏子町内を巡られます。昭和四十年代以降、二基ともトラックに奉載して神社から出発していましたが、平成16年

には中央西公園まで信州松本深会会の奉仕により担いで行き、そこから一基は担いで市内中心地域を一基はトラックで町内を巡ることとなりました。
そして本年は、神社から出発する二基のうち一基はトラックで全町内を、一基は担いで巡ることになりました。加えて担ぐのは元禄11年（一六九六）城主奉納の元神輿（市重要文化財）となりました。

これは去る平成14年の御正忌一〇〇年大祭に二基揃って担がれて神幸して以来のこととなります。明年以降も同様に予定しています。このように文化財となっている元禄時代の古い神輿を実際に担ぐ例は全国的にも珍しいものです。
ちなみに、神輿研究者として著名で、「神輿」などの写真集を出版しておられる監物恒夫氏が来松され、熱心に撮影されました。

そしてこのたび作成される「全国神輿カレンダー」に全国から選りすぐりの十二社の神輿の一基として掲載されることとなっています。

深志神社のあれこれ《1》

御神紋のこと

神紋とは、御祭神または神社の標識として用いられる紋章です。（社紋とも。）家紋と対応して平安時代後期以降に発生したといわれます。

ご祭神の事蹟や神社の由緒、鎮座地や社名また神木・神草・神使・神職の家紋などにちなむものが多く、著名な例に大神神社の杉、春日大社の藤、石清水八幡宮の巴、天満宮の梅、賀茂上・下両社の葵などがあります。

宮、お諏訪さま、向かって右本殿）と菅原道真公（天満宮、天神さま、向かって左本殿）の二柱であることによります。当社ご鎮座の由来は、まず南北朝時代のはじめ暦応二年（一三三九）にお諏訪さまがその後江戸時代になり、慶長十九年（一六一四）に天満宮が鎌田から移し祀られました。梶の葉紋はお諏訪さまの神紋で、これは知られるように諏訪大社の、そして梅鉢紋は天神さまとして著名な天満宮の神紋です。

諏訪大社の梶の葉紋（根あり梶）はご祭神の衣服の文様に、また天満宮の梅紋は菅原

道真公の在世時の愛梅の故事より用いられた菅原氏の家紋に由来しています。なお、梅花紋と梅鉢紋とがあり、当社のは劍梅鉢系統の前田梅鉢とされています。
このように梶の葉紋と梅鉢紋の二つの神紋は、当社の御祭神と奉斎の歴史・由緒を端的に示しています。また、この二つを対として神紋とする例は、全国的にみてもきわめて稀です。
ちなみに当社に残る神紋の最も古いのは、元禄十一年藩主奉納の二基の神輿に付されているものです。
当社の建物・祭具等にはこの神紋が各所に施されています。それらの写真を掲げました。（なお、表紙題字左がわ掲示もご覧下さい。）



拝殿内門帳
天満宮本殿葺
宮村宮本殿葺
拝殿屋根
賽銭箱
社務所玄関幕
江戸時代奉納
昭和27年奉納
昭和30年奉納
平成13年 金山会奉納
平成11年氏子総代会役員奉納

氏子町内の旧町名「石碑」めぐり《3》

【第三班】

中町

◆中町の由来

城下町親町の一つで、「中町」外町之為中故中町下号ス（故実伝連記）とあり、善光寺街道の道筋であった。犀川運船開通（天保三年・一八三二年）の頃は、舟も遡及していたので塩・肴問屋が軒を連ねていた。



清水

東源池・南源地・北源地

◆昭和初年の旧町名

源地

ここは中世のころ、信濃守護小笠原氏の家臣で、号を玄智といった河辺縫殿助の屋敷があった。その屋敷跡に玄智の号に因む「玄智の井戸」があり、「当国第一の名水」として知られていた。歴代の城主は「殊勝の水」として制札を掲げてこれを保護し、藩主の用をはじめ城下町の飲み水や酒造用水にも使われていたので、水源という意味を加味して源地とした。（平成八年 瑞松寺）



源地



弥生町

日ノ出町

◆昭和初年の旧町名

日ノ出町

明治二十三年片倉組が、当時水田であった清水の地に松本最初の製糸工場を開設。その後日本の製糸業が日の出の勢いで世界へ進出していくのにもなっており、工場も明治三十三年には片倉製糸紡績株式会社と規模を拡大し隆盛に向かった。町名の由来は、日の出の勢いで発展する片倉にあやかり、また松本市の東



日ノ出町

氏子総代の方々が改選されました

深志神社氏子総代が、六月末日の任期（四ヶ年）満了に伴い改選され、氏子町内より推薦された方々に、宮司より委嘱申しあげました。平成22年6月末迄ご奉仕頂きます。総代の皆様方には、改めて神社運営の為に、そして各町内の氏子の皆様に対する神社の祭儀・行事等への協力にご尽力を賜りますようお願いしあげます。

これらの総代で組織される当社氏子総代会の目的は、敬神崇祖の本義に則り、当神社を崇敬し、神恩感謝の誠をいたすとともに、

氏子総代会役員

会長	金井 利曉
副会長	水野 秀一
副会長	中村 欽哉
会計	中澤 弘行
会計	深澤 弘信
監査	宮川 進
監査	岸 利行
名誉会長	春日 信雄
名誉総代	太田 勝彦
同	竹内 功

深志神社氏子総代

平成18年7月現在（敬称略） ◎印 班長

第一班（年番 平成18年度）	本町一丁目 池田六之助
	本町二丁目 長崎 俊夫
	本町三丁目 太田 隆治
	本町四丁目 正村 宗一
	本町五丁目 降旗 清保
	伊勢町一丁目 ◎原田 欽哉
	伊勢町二丁目 中村 竹雄
	伊勢町三丁目 宮野 甫安
	新伊勢町 臥雲 毅安
	同 内ヶ島光博
	向島町 深澤 弘信
	中条東第一 大輪貴念夫
	中条東第二 窪田 彰
	中条東第三 大前 芳雄
	中条東第四 小瀬 隆晴

第二班（年番 平成19年度）	宮村町一丁目 武田信一郎
	同 伴 吉宏
	宮村町二丁目 ◎山本 達男
	博勞町 岡野 庄平
	同 高山 文雄
	長沢町 竹内 隆一
	常盤町 小穴 隆一
	栄町 金井 利曉
	同 中島誠之助
	梅ヶ枝町 水野 秀一
	東長沢町 飯島 和彦
	幸町 宮下 一夫
	錦町 中澤 保行

第三班（年番 平成20年度）	中町一丁目 中澤 清
	中町二丁目 太田 滋
	中町三丁目 木内 章皓
	清水東 岸 利行
	同 朝倉 信雄
	清水中 館石 賢治
	清水西 堀川 繁
	東源池 堀川 喬
	同 伊藤 利八
	南源地 ◎伊藤 利八
	同 平川 基栄
	北源地 小松 婆孝
	日ノ出町 大野 直門
	天神南小池町 宮川 進
	同 黒田 正明

第四班（年番 平成21年度）	飯田町一丁目 大野 貞夫
	飯田町二丁目 谷川 清
	分銅町 原 勇
	西長沢町 大澤 三郎
	西五町 春日 信雄
	国府町 山田 鮎
	神明町 藤原今朝雄
	小池町 関保田法司
	同 久保田 豊
	巾上町 ◎折井 重雄
	巾上中 武居喜美雄
	巾上南 ◎折井 重雄
	同 伊藤 親利
	特別班 鎌田 寛治
	同 池田 廣

なんでも質問箱《1》

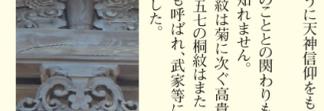
Q 入山辺の徳運寺にお参りしましたら、屋根瓦に梅鉢紋が入っていました。これは天満宮の神紋だと思っていました。が、お寺である徳運寺であるのはどうなのでしょう？



徳運寺にお参りしてご住職の谷川禪隆師にお尋ねしました。檀家の方などからも質問が折々あるようですが、残念ながらハッキリとした由来は、由來は、現在では、本堂の敷台の門の軒に、上に桐下に梅鉢の紋が伝わっているのがその名残りといえます。写真下参照。

徳運寺はもと徳雲寺と称し、鎌倉時代末元弘元年（三三三）に山家郷の地頭である山家神為頼により、臨濟宗の高僧曹村友梅禪師を慈雲寺（諏訪湖畔）から招き開かれました。その後一時退転しましたが、安土桃山時代から江戸初期に中興の祖、曹洞宗の安室正盛和尚（長野出身）が現在地に復興しました。

おそらく、この復興されて曹洞宗に改められて以降、寺の紋として用いられたのではないかとどのご住職のお話です。またかつては建物内部の欄などには菅公ゆかりの梅鉢紋が用いられている背景を推測するに、一は室町中期以降、菅公が中国に渡り禅僧無準師範の教えを受けたという渡唐天神説が禪宗で広まりこれに伴い禪宗



敷台の門上